#### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歴史をどのように表象するか:文学と歴史学の接点
Sub Title	Comment on représente l'histoire : Au croisement de la littérature et de la discipline historique
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kōsei)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication	2019
year	
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.69 (2019. 10) ,p.121- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20191031-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 歴史をどのように表象するか

## ----文学と歴史学の接点----

# 小 倉 孝 誠

筆者(小倉)は現在、文学と社会、文学と歴史、さらには文学と歴史学の関わりを問い直す著作を構想している。文学が社会や歴史の現実をどのように語り、描いてきたのか。そこではどのような美学とイデオロギーが動員されているのか。広く言えば、リアリズム文学あるいは文学のリアリズムを再考しようという試みである。古くはジェルジ・ルカーチのリアリズム論やアウエルバッハの『ミメーシス――ヨーロッパ文学における現実描写』(1949)から、1980年代の「ニュー・ヒストリシズム」を経て、現代のブルデューと文学社会学に至るまで、文学と歴史の関係性のあり方を問いかける潮流は連綿と続いてきた。20世紀後半の構造主義批評は、歴史的現実であれ作家の内面性であれテキストの「外部」を否定し、1970年代以降の「言語論的転回」はそもそも歴史的「現実」という実体そのものに懐疑的で、すべてが言説による構築だと主張した。しかしそうした潮流が勢いを失い、文学研究が現実表象の美学をあらためて俎上に載せている現在、文学と歴史の関係への問いかけは新たな段階を迎えているように思われるのだ」。

日本では、京都大学文学部出身の若手西洋文学研究者たちが中心になって「リアリズム文学研究会」(世話人:大北彰子、霜田洋祐、西尾宇広、野田農)を立ち上げ、意欲的に研究発表会とシンポジウムを開催している。各国文学という枠を超えて、西洋文学全体におけるリアリズムを根底から問い直そう

<sup>1)</sup> この問題をめぐってフランス語で書かれた近年の成果としては、次の著作をあげておく。Thomas Pavel, *La Pensée du roman*, Gallimard, 2003. 増補改訂版は 2014 年。

本稿は、このテーマをめぐって現代フランスで誰がどのような著作を刊行し、いかなる発言をし、何が議論されているかを概観するささやかな研究 ノートである。

#### 文学と歴史の誘惑

文学、とりわけ小説と、歴史および歴史学との関係をどう捉えるかという 問いかけは、旧くて新しい。両者がどちらも語りの構造に依拠するとして言 説上の類似性を指摘する立場であれ、逆に両者の認識論的な差異を強調して、 明確な境界線をもうける立場であれ、あるいはまた一定のテーマを論じる歴 史叙述が文学作品を重要な史料として活用する場合であれ、文学と歴史学、 作家と歴史家は緊張をはらんだ交流と論争を繰りひろげてきたと言えるだろ う。その現象は、近年のフランスでも顕著に見られる。

文学者が歴史のどの時代、どのような側面に関心をいだくかは、同時代の歴史研究の状況に多少とも規定される。フランス革命 200 年祭にあたる 1989 年前後には、この出来事をめぐる出版やシンポジウム、講演が無数に企画された。フランスの民主化と近代性をうながす契機となったこの事件は、つねにフランス人の関心を引きつけてきたが――それはちょうど、われわれ日本人が幕末から明治維新の推移に興味をもち、この時代をめぐる歴史小説やテレビドラマが数多生産されるのと同じだ――、20世紀末にはその現象がとりわけ著しかった。

その流れは今世紀にはいってからも続く。フランソワーズ・シャンデルナゴールの『部屋』と、映画化もされたシャンタル・トマ『王妃に別れを告げて』がどちらも 2002 年に刊行されたのは、その意味で示唆的だろう。前者は、ルイ十六世の息子が 1792 年に革命派に捕らわれ、タンプル塔で過ごした最後の年月が語られる。後者はマリー=アントワネットに仕えた朗読係の

とする意欲的な研究会である。その成果の一端は2018年2月3日、京都大学で開催された公開研究会の報告書に示されている。リアリズム文学研究会編『19世紀文学とリアリズム――共時的文学現象に関する文化横断的研究』(2018年3月)。

女性の目をとおして、1789年7月14日から16日まで、つまりパリの民衆がバスティーユ監獄を襲撃してからからの3日間にヴェルサイユ宮殿で生起した出来事を語る。どちらも架空の回想録という形式をまとい、無名の人物が歴史の激動に遭遇し、歴史的人物たちの生態と言動を観察する。ユルスナールの『ハドリアヌス帝の回想』(1951)やウンベルト・エーコの『薔薇の名前』(1980)も例証するように、当事者による架空の回想録あるいは手記は、歴史小説がしばしば採用する形式である。

21世紀にはいってからの注目すべき現象は、第二次世界大戦やヴィシー政権時代を背景とする作品が数多く発表されていることだろう。戦後のフランスでは、ヴィシー政権時代でも大部分のフランス人はドイツにたいして公然と、あるいは秘密裡に抵抗したという「レジスタンス神話」が長いあいだ優勢だった。しかし1970年代以降、ロバート・パクストンらの研究と史料発掘によって、ドイツ占領下のフランス政府が積極的にナチスの政策に協力していたこと、多くの一般市民がユダヤ人の強制連行に加担するか、あるいはそれを黙認したことが明らかにされてきた。フランスを含む連合国側とナチス・ドイツの抗争を善と悪、正義と暴力という単純な二項対立で捉えるのではなく、それぞれの陣営内部で生起したさまざまな葛藤や行き違いをていねいに解きほぐそうという潮流が生まれた。ヴィシー時代をめぐって封印されていた歴史の記憶が解放されたのである<sup>21</sup>。

パトリック・モディアノはすでに 1960 年代末から、ヴィシー政府時代のパリを小説の舞台にしていた。『エトワール広場』(1968) では、ユダヤ人のシュレミロヴィッチが妄想と現実が入りまじった世界を彷徨し、最後はゲシュタポに拷問される夢から目覚める。『夜のロンド』(1969) では、ゲシュタポに協力する主人公が、対独レジスタンス運動を調査するスパイとして潜

<sup>2)</sup> この点についての文献は多いが、たとえば次の著作を参照していただきたい。 ロバート・パクストン『ヴィシー時代のフランス』渡辺和行、剣持久木訳、 柏書房、2004 年;渡辺和行『ナチス占領下のフランス:沈黙・抵抗・協力』 講談社、1984 年;宮川裕章『フランス現代史 隠された記憶』ちくま新書、 2017 年。

入し、さらにそのレジスタンス闘士たちからゲシュタポに関する情報を収集 せよという任務をあたえられる。二重スパイとして暗躍しながら、自己を喪 失していく男の物語が、緊迫した雰囲気のなかで展開していく。セリーヌを 彷彿させる荒々しい文体と矯激なイメージを駆使して、モディアノは「ナチ スに抵抗した勇気ある国民」という美しい神話に疑義を突きつけたのだっ た。

作家はその後も、『ドラ・ブリュデール』(1997、邦題は『1941 年、パリの尋ね人』)で、再びこの時代に立ち戻る。1941 年の暮れ、パリの新聞にある尋ね人広告が載っていた。寄宿舎から姿を消したドラという名の15歳の少女の行方を案じた両親が出した広告だった。作家はこのユダヤ人少女の痕跡を求めて、ブリュデール一家が住んでいたパリ北部18区、ドラの学校があった12区などをつぶさに歩きまわり、かすかな手掛かりに依拠して、少女のありえたであろう行動と心理ドラマを再現してみせる。占領下の陰鬱なパリを喚起しながら、モディアノは、数か月後にドラが強制収容所に送りこまれたことを示す。これは小説というより、一種のルポルタージュ文学である。

### 文学から歴史学への越境――リテル、エネル

21 世紀の現代の特徴は、作家たちが職業的な歴史家と同じように綿密な 史料調査と膨大な文献渉猟を踏まえつつ、歴史の空白を埋めようとする作品 を創造していることだ。そしてそれが歴史家たちの側に無視しがたい反応を 引き起こしているのだ。

衆目の見るところその発端は、かつてナチス親衛隊の将校だったマックス・アウエ(架空の人物)の回想録(またしても回想録!)という形式をまとう、ジョナサン・リテルの小説『慈しみの女神たち』(2006)だろう。第二次世界大戦後、アウエはフランスに移り住み、母親がフランス人で少年時代をフランスで過ごしたこともあり、フランス語は流暢であり、彼の過去を怪しむ者はいない。北フランスでレース製造業を営む彼は結婚し、子どもに恵まれ、ごく普通の市民生活を送り、読者に向かって「わたしはあなた方と

同じ普通のひとりの人間にすぎない<sup>3)</sup>」と宣言し、読者に「同胞たちよ」と呼びかける。その挑発的な態度は、人類の犯罪への共感的な理解、さらには許容しがたい免責を求める邪悪な戦略だ、とフランスでは批判を浴びたほどだ。

アウエは親衛隊の一員として戦争に加わり、ユダヤ人虐殺に加担した。しかし自分は邪悪な人間でも、残虐な男でもないと言う。「わたしにとっては、大部分のひとにとってそうであるように、戦争と殺戮とはひとつの疑問、答えのない疑問であるのだ。というのは夜の闇のなかで叫び声をあげても、誰も答えてくれる者はいないのだから。<sup>4)</sup>」法学博士の資格を有する知識人、子ども時代にピアノを習った音楽好き、回想に無数の文学作品や哲学書からの引用がちりばめられていることから分かるように、豊かな人文的教養をそなえた彼が、自分の過去と戦争の惨劇を語りだす。

そこではナチスの犯罪と第二次世界大戦をめぐって、正確で驚くほど大量の歴史的知識が投入され、当事者の視線から、つまり出来事の内部から歴史が再構築されていく。東部戦線の戦い、ユダヤ人絶滅収容所、ウクライナのバビ・ヤール大虐殺、スターリングラードの戦い、そしてベルリン陥落と、第二次世界大戦中のおもな出来事はひとつも忘却されていない。おぞましく、目を背けたくなるようなエピソードが、奔放で、ときには妄想的な想像力によって支えられる語りのなかで連なっていく。その幻想的リアリズムは、歴史家たちのあいだに賛否両論を誘発した。

リテルの小説から3年後に発表されたヤニック・エネルの『ヤン・カルスキ』(邦題は『ユダヤ人大虐殺の証人ヤン・カルスキ』)は、ユダヤ人虐殺を目撃した実在のポーランド人ヤン・カルスキ(1914-2000)の活動を描いた作品である。ポーランドの知識人階級に生まれたカルスキは、仲間とともにナチスにつかまり拷問を受けるが、首尾よく脱出に成功する。その後、ひそかに見張り役になりすまして国内の強制収容所の凄惨な現実を目に焼き付

<sup>3)</sup> ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』菅野昭正ほか訳、集英社、上巻、2011 年、p. 34. 原著は Jonathan Littell, *Les Bienveillantes*, Gallimard, 2006.

<sup>4)</sup> 同上、p. 34.

けたという。やがてポーランド政府の密使として、カルスキはユダヤ人絶滅 政策のおぞましい実態を連合国側に伝えるべく、フランスを経由してイギリ スに向かい、さらにはアメリカに渡ってルーズヴェルト大統領にも会った。 彼の主張は無視され、カルスキはその後長い沈黙を守りながらアメリカの大 学で教壇に立ちつづけた……。

エネルの作品もまた、膨大な歴史資料と綿密な調査にもとづいており、作家は第二次世界大戦の公式の歴史が沈黙に付してきた細部に光をあてようとする。直接の目撃者や証人がしだいに消えていくなか、作家は彼らの最後の声を復元しようとしているかのようだ。その主要なメッセージは、カルスキの証言と警告にもかかわらず、連合国側は長いあいだホロコーストの存在について懐疑的な態度を崩さず、英米とソ連のあいだにポーランドをめぐる政治取引もあって、結果的にユダヤ人救済の機会を逸したというものである。この作品は三部構成で、第一部は映画『ショア』(1985)で、カルスキがクロード・ランズマンのインタビューに答えた内容、第二部は彼が1944年に刊行した著作『ある秘密国家の物語』の要約である。

そして作品の半分を占める第三部は、カルスキの架空の回想という形式で語られる一人称の物語になっている。アメリカに居を構えて以降、カルスキは各地を講演してナチスの犯罪を訴えつづけたが、ルーズヴェルト大統領をはじめとして「誰も僕の言うことを信じようとしなかった 5)」。歴史の証人として語ることの難しさ、信じようとしない人々の前で語ることの悲劇をカルスキは痛感させられる。信じがたいことを信じてもらうための言葉はいかにして可能なのか? こうしてカルスキは 1944 年に本を出版したが、人々は彼の過酷な体験に同情したものの、ホロコーストの現実に対峙しようとはしなかった。作者エネルはカルスキが『ある秘密国家の物語』を執筆するに至った経緯を再構成し、彼の内面的ドラマに迫る。1970 年代以降、彼の学生たちが「証人」としてのカルスキの言葉を求めるようになったのが転機

<sup>5)</sup>ヤニック・エネル『ユダヤ人大虐殺の証人ヤン・カルスキ』 飛幡祐規訳、河 出書房新社、2011 年、p. 115. 原著は Yannick Haenel, *Jan Karski*, Gallimard, 2009.

だった。

エネルは歴史の一部としてのカルスキを甦らせ、歴史と記憶、歴史と証人の関係を再考することで、文学と歴史学の境界をあらためて審問に付す。文学には、記憶を蘇生させ、それを後世に伝える使命があるという認識がそこに感じられる。実際、『ユダヤ人大虐殺の証人ヤン・カルスキ』が出版された後ある新聞に掲載されたインタビューで、作家は次のように言明している。

わたしが探求しているのは、ドキュメンタリーとフィクション、歴史と詩、表象可能なものと表象不可能なものの緊張関係のうちに正当性を有するような文学です。わたしが思うに、そのような稜線上で、境界そのものを問いかけながら未来の文学は展開することになるでしょう<sup>6</sup>。

リテルの『慈しみの女神たち』は、架空の人物で元ナチスの親衛隊員アウエによる、すなわち戦争犯罪の当事者による架空の語りであり、エネルの『ユダヤ人大虐殺の証人ヤン・カルスキ』は、迫害された犠牲者であり、実在した男カルスキの人生を再構成する。同じ戦争を描きながら、二作品の視点はまったく逆である。また前者は、回顧的な道徳判断や現代の価値観を混入させることなく、歴史家が踏みこもうとしない歴史の当事者の内面に分け入って、歴史の真実をえぐり出そうとする。後者は史料が提示する歴史的事実の枠内にとどまりながら、歴史学の規範を逸脱してまで連合国の行動に倫理的な判断をくだす。そうした差異にもかかわらず、文学と歴史学の制度的な境界を意識的に、そして方法論的に超えようとしている点では共通している。文学とりわけ小説は歴史を読み解く権利を正当に主張できる、という自負がそこに感じられるのだ。そして第二次世界大戦というまさしく歴史的な事件が、現代作家たちにとって尽きせぬ着想源であることも証言している。歴史を排除した「ヌーヴォー・ロマン」や、すべては言説にすぎないとして歴史の内実性を捨象しようとした「言語論的転回」の時代はすでに遠い。

<sup>6)</sup> Yannick Haenel, *Libération*, 30–31 janvier 2010.

#### 現代文学と第二次世界大戦への関心

戦争への関心は、2009年に刊行されたもうひとつの小説にもよく表われている。ローラン・ビネ『HHhH』(邦題は『HHhH プラハ、1942年』)である<sup>7)</sup>。物語の舞台は1942年のプラハ。そこではナチス・ドイツのゲシュタポ長官で、〈死刑執行人〉、〈金髪の野獣〉と恐れられたハイドリヒが、総督代理として君臨していた。ロンドンに亡命していたチェコ政府は、ハイドリヒ暗殺のため、クビシュとガブチークという二人の青年パラシュート部隊員を送りこむ。〈類人猿作戦〉と呼ばれたこの計画は成功するが、実行犯たちは逃れた教会の納骨堂で悲惨な死をとげ、彼らに協力した者たちや親類縁者はすべて抹殺された。本書の原題 HHhH とは、「ヒムラーの頭脳はハイドリヒと呼ばれる」を意味するドイツ語の頭文字にほかならない。

史実にもとづく小説であり、ハイドリヒも実行犯たちも実在した人間である。作者はハイドリヒの狂気と悪魔的な言動を丹念に跡づける一方で、死を覚悟して暗殺計画に着手する愛国者たちの、感動的な姿を描きだす。教会に隠れたクビシュたちが、同胞の密告によってナチス親衛隊に発見され、8時間におよぶ抵抗の末に命を散らすシーンは、まさに叙事詩のような迫力で読者の心をとらえる。

ナチスの報復は残虐をきわめた。実行犯たちをかくまったと疑われたリディツェ村は、ヒトラーの命令により男たちが銃殺、女子どもは強制収容所に送られた末、村全体が焼き尽くされ、地上から消えてしまった。文字どおり、ひとつの村が地図から抹消されたのだ。ナチスの狂気と暴虐を示す事件として、後世まで語り継がれることになった事件である。

歴史上の出来事を語ったという意味で歴史小説だが、一般の歴史小説とは 異なる。作家が事実を再構成するためにおこなった資料調査や関係者への聴 き取りのようす、そして作家の歴史観が、過去の物語のなかにしばしば介入 してくるからだ。そして、事件を再現する作家の強い情動や解消できない疑

<sup>7)</sup> Laurent Binet, *HHhH*, Grasset, 2009. 邦訳はローラン・ビネ『HHhH プラハ、1942 年』高橋啓訳、東京創元社、2013 年。

問が率直にさらけ出される。後に見るように、これは現代の歴史家イヴァン・ジャブロンカが、自分の父方の祖父母の生涯を語る著作『私にはいなかった祖父母の歴史』(2012)のなかで用いた方法である。作家ビネはためらいや、怒りや、共感を絶えず覚えながら自作を書き進めたことがよく分かる。こうして読者は、過去を小説化する作家の現在に立ちあうのである。フロベール(とくにカルタゴの内乱を素材にした歴史小説『サランボー』、1862)、ミラン・クンデラ、ミシェル・ウエルベックら他の作家にたいする言及も多い。『HHhH プラハ、1942年』は紛れもなく小説であると同時に、歴史に想をえた小説をどのように構築できるのか、あるいは先行作家たちはどのように構築してきたのかをめぐる考察にもなっている。小説のエクリチュールをめぐる小説、歴史小説の争点を考察する歴史小説、と言ってもよい。

現代フランスにおける文学と歴史学の越境、あるいは文学における歴史の 誘惑を証言する最後の例として、2017年に刊行されて評判になったふたつ の作品について述べておこう。現代フランス文学界の趨勢の一端をよく伝え てくれると思われるからだ。

まず、フランスで最も権威あるゴンクール賞を受賞したエリック・ヴュイヤールの『議事日程』は、1938年に起こったナチス・ドイツによるオーストリア併合(アンシュルス)を時代背景にした作品である<sup>8)</sup>。その後始まった第二次世界大戦とユダヤ人虐殺の惨禍に比べれば、このオーストリア併合は歴史のページにおいて大きく扱われる出来事ではない。作者はこの目立たない出来事に焦点を据え、それが恐るべき悲劇の前触れだったことを慎ましく、しかし決然と示唆する。冒頭で語られる、ヒトラーの招きに応じて集まったクルップやジーメンスなどドイツ財界人が、静かに、ほとんど屈託なくナチス政権を支持する場面や、時代の流れを認識できず、ヒトラーに操られるオーストリア首相クルト・シューシュニックの戯画的な肖像が強い印象を残す。ヴュイヤールはフランス革命や第一次世界大戦に素材を汲んだ作品

<sup>8)</sup> Eric Vuillard, L'ordre du jour, Actes Sud, 2017.

も発表しており、歴史小説の作家として確固たる地位を占めている。

次に、ルノドー賞を授与されたオリヴィエ・ゲーズの『ヨーゼフ・メンゲレの逃亡』もまた、ナチスをめぐる物語である<sup>9)</sup>。ただし、戦争やユダヤ人虐殺をテーマにするのではなく、ナチス政権の中枢を担った人物たちが戦後いかに生き延びたかを、ドキュメンタリー風に語る。ブエノスアイレスに逃れてナチス礼讃を続けたアイヒマンほど有名ではないが、メンゲレはナチス親衛隊将校として、アウシュヴィッツで囚人に人体実験を施し、「死の天使」と恐れられた男である。巧みに身分を偽ってブラジルに渡り、1979年まで存命した。ゲーズの作品はこのメンゲレの生涯をたどりながら、こうした戦犯が生き延びることを可能にした逃亡網の存在、南米の独裁政権の腐敗、それを支え、ナチズムさえ許容した現実政治の複雑な力学に迫っていく。

以上の例に見られるように、ナチスやユダヤ人迫害や第二次世界大戦を主題にした文学の隆盛は、21世紀にはいってからのフランスできわめて顕著な傾向である。作者は狭義の小説家にかぎらず、ジャーナリストや歴史家にも及ぶ。歴史や現実が提供する要素にもとづいて組み立てられた物語は、フランスの批評界でしばしば「エグゾフィクション exofiction」と呼ばれるが、これは自伝的小説である「オートフィクション autofiction」との対比で創られた用語である。実在した人物を登場させるが、歴史の空白を物語によって充填し、資料調査する作者みずからの営みも物語の一部として組み込むという点で、歴史書やルポルタージュと異なる。20世紀末以降、歴史、記憶、忘却は人文科学と社会科学全般の大きな主題になっており、文学もまた例外ではない。リテル、エネル、ビネ、ヴュイヤールそしてゲーズらの作品は、そのことを雄弁に示しているのだ 10)。

<sup>9)</sup> Olivier Guez, *La Disparition de Josef Mengele*, Grasset, 2017. 邦訳はオリヴィエ・ゲーズ『ヨーゼフ・メンゲレの逃亡』高橋啓訳、東京創元社、2018年。

<sup>10)</sup> これはフランスにかぎった現象ではない。第二次世界大戦やホロコーストだけでなく、20世紀末のユーゴ紛争など、戦争や内乱をテーマにした歴史小説が近年の西洋文学で大きな潮流になっていることは、次の著作に詳しい。 Emmanuel Bouju, *La Transcription de l'histoire. Essai sur le roman européen* 

#### 歴史学からの反応

このような文学からの挑戦状にたいして、歴史家たちが沈黙を守っているわけにはいかない。これまで紹介した21世紀の文学作品に呼応するかのように、そして実際、リテルやエネルやビネの小説にはっきり言及しながら、2010年と2011年に重要な学術誌と論壇誌が、文学と歴史学をめぐる新たな知的構図に敏感に反応する特集号を相次いで組んだ。そこでは何が問題になっているのだろうか。

フランスを代表する歴史研究誌『アナール』が 2010 年 3-4 月号で、「文学の知 Savoirs de la littérature」と題する特集号を組んだ。ここでは歴史学の側から、文学と歴史学の切断を確認するのではなく、文学にはさまざまな知を生産する機能がそなわっているのだという認識が出発点にある。「文学には、それ固有のエクリチュールの形式によって、倫理的、科学的、哲学的、社会学的そして歴史的な一連の知識を生みだす力があるのだと認めよう 111 」。こうして文学史家たちが、歴史研究との差異には注意を払いつつ、16世紀のモンテーニュから 20世紀のジュリアン・グラックまで、文学者たちが世界と社会について、さまざまな技法を用いて多様な解釈を提示してきたことを示す。20世紀後半の構造主義批評は「テキストの外部」を捨象したが、現在では文学のもつ現実認識性の次元があらためて着目されつつある。

『アナール』 誌特集号の編者はとりわけ、リアリズム小説が有する世界に関する解釈能力の高さを再評価する。19世紀は文学のかたわらで、歴史学、社会学、民族学などが成立して知の専門化が進行した時代だが、それにもかかわらず(あるいは、だからこそ)文学は社会と世界を読み解こうとしたのだろう。そこでは現実とフィクション、歴史学と文学という二項対立が意味をなさない。たとえばバルザックの『人間喜劇』における典型性の機能は、草創期の歴史学や社会科学における知の構築様式に対応する。また時間、期

de la fin du XX<sup>e</sup> siècle, Presses universitaires de Rennes, 2006.

<sup>11)</sup> Étienne Anheim et Antoine Lilti, « Savoirs de la littérature », *Annales*, marsavril 2010, pp. 253–254.

待、情動、戦争、死などとの関係における人間的体験の歴史性を考察するに 際して、リアリズム文学は多くのことを教えてくれるのである。

リアリズム文学を単なる指示対象物の資料体と見なすのではなく、現実と世界を解釈する技法としてそれがどのように推移し、どこまで有効かを問いかけることが重要なのだ。なぜなら、それが社会表象や文化表象の歴史にも寄与するはずだからである。こうして『アナール』誌は、アウエルバッハの『ミメーシス』や、トマ・パヴェルの『小説の思考』(2003) に言及しながら、文学研究と歴史学の共同戦線を模索する。歴史家が文学の認識力を評価するのと同時に、文学史家が歴史学への貢献を要求しているということである。

『アナール』誌が文学研究者の論考に大きな位置をあたえ、彼らは文学作品の分析が歴史学に寄与すると主張する点で一致するのに対し、「フィクションが歴史をとらえる」と題された『デバ』誌(2011年5-8月号)では、歴史家と文学史家と作家が対話を繰りひろげている<sup>12)</sup>。しかもその立場には対立ではないにしても、相違点がかなり際立つ。歴史家としてはピエール・ノラ、モナ・オズーフ、アラン・コルバン、そしてアントワーヌ・ド・ベックらが寄稿者として名を連ね、それぞれ文学と歴史学の接点、その共通性、歴史研究が文学テキストをなぜ、どのように活用するか、そして映画における歴史表象の問題を考察している。

近年、過去の出来事と記憶の表象をめぐって、文学と歴史学がしばしば土壌を共有している。回想録、自伝、ルポルタージュなど、これまで文学のジャンルと見なされていた領域に歴史家たちが参入しているのは、そのひとつの徴候にほかならない。ノラの論考「歴史学と小説。境界線はどこにあるか?」と、オズーフの論考「小説家の物語、歴史家の物語」はその点を認めたうえで、そして二人とも先に言及したリテルやエネルやビネの作品がもつ革新性を評価しつつ、文学と歴史学の境界線を見定めようとする。それは歴史研究の特徴を強調することによって、明瞭になるだろう。

まず、歴史学はひとつの実践、職業であり、記述と分析のために信頼性の

<sup>12)</sup> Le Débat, nº 165, mai-août 2011, « L'histoire saisie par la fiction ».

高い史料を選びとり、確定し、分類しなければならない。歴史家がどのような問いを立てるかによって史料の発掘と選択と構成は変わってくる。こうした知的操作から生みだされる研究成果は社会的な産物であり、社会に向けて公表されるべきである。第二に、これはとりわけノラの見解だが、「言語論的転回」の論者たちが主張するのとは異なり、歴史上の出来事や事実というものは確かに存在し、その存在自体を否定することはできない(これは歴史修正主義者たちへの批判だろう)。いわゆる歴史の空白や謎は、史料や文献がなければ空白と謎のまま残すしかない。それを想像力の働きで充填するのは文学の役割ということになる。そして第三に、歴史研究は他者による検証を求めるし、それを可能にしなければならない。したがって歴史は見直され、再解釈され、ときにはまったく新たな次元が啓示されたりもする。以上は、職業的な歴史家の側から提出された説得的な議論と言えよう。

他方、感性の歴史学の泰斗アラン・コルバンは「歴史家と物語。使用、誘惑、必要性」と題する短い論考において、異なる視点から問題提起する。文学作品はそれ自体で、過去の人々の実践の「証拠」になるわけではないから、歴史家が史料として用いる際には細心の注意を払うべきであろう。とはいえ表象の歴史、心性史、想像力の歴史、感覚の歴史といった分野においては、従来参照されてきた記録文書、行政・警察史料、司法記録、教会関係の文書だけでは不十分なことは否定できない。そこでは文学作品が証拠ではないにしても、貴重な「証言」になる。歴史学における「情動論的転回」の可能性を示唆するコルバンはこうして、扱うテーマによっては小説、詩、日記、手記、書簡集、自伝、回想録などを積極的に活用することを推奨する。

『アナール』誌と『デバ』誌の特集号では、論者の立ち位置は微妙に異なり、議論の主眼も多様性を示す。とはいえ21世紀にはいってから新たな展開を見せはじめた歴史に素材を汲む小説の隆盛に刺激されるかたちで、歴史家たちが自分たちの学問の基盤と展望をあらためて問い直しているという点は共通である。

#### 文学と歴史学の関係――その過去と現状

ここで問題を整理しておこう。フランスに関するかぎり、歴史学の位置づけがおおきく変わり、それにともなって文学との関係性が再考された時代がおそらく四つある。

まず19世紀前半のロマン主義時代。フランス革命とナポレオン帝政の余波のなかで、フランス人は人間の生活と社会の運命が歴史の流れに強く規定されることを自覚し(古典主義時代との違い)、過去に目を向けた。こうして近代的な学問としての歴史学が成立し、国民と国家の起源を問う歴史が書かれた。ギゾーの『フランス文明史』(1830)、ティエリーの『第三身分の形成と進歩の歴史』(1853)、そしてミシュレの記念碑的著作『フランス史』(1833–67)がその鮮やかな例である。この時代、歴史家たちはウォルター・スコットの歴史小説やシャトーブリアンの叙事詩的著作に熱狂し、文学が有する喚起力の魅力に敏感だったし、作家のほうも、文学は歴史の流れを解読することに貢献できると自負していた。歴史学と小説は学問と創作、科学とフィクションとして対立するものではなく、どちらも認識と語りの圏域に属する言説と見なされた<sup>13)</sup>。

続いて、19世紀末に大きな転換が起こる。歴史研究は文学との蜜月状態から切り離され、純粋な「科学」として制度化されたのである。ガブリエル・モノーとエルネスト・ラヴィスを唱導者とし、ソルボンヌ大学を牙城として成立したこの実証主義歴史学は、国内各地の古文書発掘と、厳密な史料批判を方法論として展開していく。そこには、安定期にはいった第三共和制が市民道徳と国民意識を培うために歴史学を国家的な教育装置にしようとした、という意図も作用していた。これはフランスに限らず、近代国家と教育制度が整備される段階でどの国もおこなうことで、日本の明治政府も実践したことである。

<sup>13)</sup> 筆者はかつて、ロマン主義時代の歴史学と文学の関係を論じたことがある。 小倉孝誠『歴史と表象――近代フランスの歴史小説を読む』新曜社、1997年、 第2-3章。

第三の転換点は、ストラスブール大学の若き歴史学教授だったマルク・ブロックとリュシアン・フェーヴルが1929年に研究誌『アナール』を創刊したことから始まる。歴史学は政治史や外交史や軍事史を特権化することをやめ、社会構造や、経済的推移や、人々の心性を考察する方向にシフトし始めた。それは19世紀末に確立した国家史や国民の歴史という概念を相対化することであり、歴史学は文学史研究、経済学、社会学、人類学、人口統計学などさまざまな人文・社会科学の領域へと開かれていった。フェーヴルがラブレーを起点にして、16世紀フランスの「不信仰」の問題を論じたのはその見事な例である。

そして第四の時期にあたる 1970 年代以降では、歴史家だけでなく哲学者もまた歴史学と文学、歴史叙述とフィクションの境界を問いかけ、認識論レベルにおける両者の差異と類似を考察した。ポール・ヴェーヌ『歴史をどう書くか』(1973)、ミシェル・ド・セルトー『歴史のエクリチュール』(1975)、ジャック・ル・ゴフ『歴史と記憶』(1988)、ポール・リクール『時間と物語』(全3巻、1983-85)などが代表的な著作である。アメリカではヘイドン・ホワイト『メタヒストリー』(1973)やピーター・ゲイ『歴史の文体』(1974)、イタリアではカルロ・ギンズブルグ『歴史・レトリック・立証』(2000)などが注目すべき成果だろう。彼らは「言語論的転回」と距離を置きつつ、歴史書も文学も、人間や社会の体験を時間性のなかで構築する言説であり、歴史書には歴史家の世界観を露呈するレトリックが浸透していると指摘する点では共通する。他方で、文学と歴史学の境界線をはっきり引いて安易な混淆を認めない歴史家、さらにはより留保をつけた態度表明に終始する歴史家もいた。

立場の違いを超えて彼らが一致して問題にしたのは、歴史を忘却から救う「記憶」の重要性である。こうして文化と社会のさまざまな領域が、国民の記憶にふさわしい対象となる。フランスの歴史界で記憶に市民権をあたえたのは、ピエール・ノラである。

こうして現在が重視され、記憶されるよう運命づけられる。つまり痕

跡の崇拝や、歴史の強迫観念や、文化遺産の収集や、国民生活を表現するものの無限の拡大を運命づけられる。国民生活の歴史だけでなく、その風景、伝統、料理、現在では消滅した産物にまで記憶が拡大されるのだ。すべてが歴史的であり、すべてが思い出に値し、すべてがわれわれの記憶に属する 140。

ノラが監修した『記憶の場』(全7巻、1984–1993) は、記憶が歴史研究の場で確固たる位置をしめたことを示す記念碑的な成果であろう。

同じくノラによれば、1970-80 年代に歴史学の構図が根本から変わったことの背景には、同時代的な世界情勢の推移があった。それ以前は歴史学の領域で、アナール学派の支配のもと、政治的なものや国家的なものはテーマとして冷遇されていた。しかしアルジェリア植民地戦争とそのトラウマ、ゴーリズム(ドゴール主義)と共産主義の共存と葛藤、共産主義の崩壊、経済危機などが、国家的なものと国民的な遺産を読み直すよう促し、それにともなって「記憶」が歴史研究の表舞台に登場してきたのである。フランスはもはや革命の祖国という特権を誇ることはできないし、ましてや文明の中心でもない。そうした国家神話は、フランス人の集団的アイデンティティとしてもはや機能しないのだ。いまや国民統合に資するような新たな歴史的記憶を構築する時代がはじまったのである 150。

### 歴史学の底流

21世紀にはいってまもなく 20年が経過しようとしている現在、文学と歴史学の関係はどのような位相にあるのだろうか。もっとも顕著な現象は両者の緊張をはらんだ接近であり、文学においても歴史学においても「物語」が

<sup>14)</sup> Pierre Nora, Présent, nation, mémoire, Gallimard, 2011, p. 25.

<sup>15)</sup> *Ibid.*, « Introduction ». ちなみにドイツでも 1990 年代にはいってから、「想起の文化」、「記憶文化」という概念が用いられるようになった。Cf. アライダ・アスマン『想起の文化 忘却から対話へ』(2013) 安川晴基訳、岩波書店、2019 年。

正当な市民権を認められるようになったことだろう。

歴史学における物語は、もちろん 21 世紀になってから出現したものではない。イギリスのローレンス・ストーンが、フランスの状況をも考慮に入れながら「物語の復権」と題する論考を発表したのが 1979 年のことだった。物語の回帰と呼ばれもするこの傾向は、1990 年代にはいっそう鮮明になり、たとえば歴史上の人物をめぐる伝記ジャンルの成功として表われる。中世史家ジャック・ル・ゴフの『聖王ルイ』(1996) が専門家たちの高い評価を受けると同時に、一般読者からも広く迎えられたことはその例である。1980年代頃まで、長期にわたる時間の流れのなかで社会構造の変化や人々の心性を探ろうとしたアナール学派の方法論からすれば、どんなに重要な国王や政治家であれ特定の個人にスポットを当てることは異端だった。「偉人伝」などはアカデミックな職業的歴史家が書くものではない、とされていたのである。しかし歴史家たちは、卓越した人物の事績を叙述することをつうじて、ひとつの時代の精神と感性を蘇らせることができるということにあらためて気づいた。構造や心性を分析する歴史書が静的になりやすいことへの、異議申し立てが含まれていたかもしれない。

もちろん、物語は突如として回帰してきたわけではない。ミシェル・ド・セルトーは『歴史のエクリチュール』のなかで、分析的な歴史学のほかに、過去の人々の個別的な体験を細部にわたって再現する歴史学、人間が残したさまざまな痕跡をつうじて過去の人間の姿を等身大で構築する研究の正当性を唱えていた。その呼びかけに応えるかのように、ル・ロワ・ラデュリの『モンタイユー』(1975) や、イタリアのギンズブルグの『チーズとうじ虫』(1976) はどちらも 1970 年代、そしてフランス 18 世紀史の専門家アメリカ人ダーントンの『猫の大虐殺』が 1980 年代に刊行されている。いずれも個別の「事件」や「出来事」を出発点にしてひとつの社会と時代の集合表象を読み解き、一般市民の日常性をあざやかに叙述した試みである。広く言えば、「ミクロストーリア」と命名された潮流である。『モンタイユー』はルノドー賞という権威ある文学賞の候補作になったほどで、著者の語りの技法が称賛された。物語は死の灰から蘇生したのではなく、静かに、柔軟に生き延びて

いたのである。

#### アラン・コルバンの位置

では、現代の状況はどうなっているのだろうか。

叙述の形式のうえでも、扱う文献の点でも、文学と歴史学の幸福なつながりをもっともよく示しているのがアラン・コルバンだろう。身体、欲望、感覚、自然への感性、情動などをおもな研究対象として、感性の歴史と表象の歴史を代表するコルバンは絶えず文学への誘惑に駆られているように見える。史料が欠落している対象や、謎めいた現象と遭遇したとき、彼は好んで小説、詩、日記、手紙、自伝を参照する。感性や情動のように数量化された痕跡を残さない対象、行政や司法や教会当局によって記録されなかった現象を考察するためには、まさしく文学作品や内面のエクリチュールが恰好の証言を提供してくれるということだ。日記、手記、手紙は本来刊行されることを想定していないエクリチュールであり、だからこそ人々の感性や情動が率直に露呈しやすい。こうして彼は近年の著作『木陰の心地よさ』(2013)、『静寂と沈黙の歴史』(2016)、『草地の爽やかさ』(2018) において、文学の言説に広く依拠した歴史叙述を展開してみせた。

史料面だけでなく、叙述のスタイルにおいてもコルバンは文学との類縁性を示している。先に歴史上の人物をめぐる伝記の隆盛について触れたが、特定の人物を中心とする歴史研究の対象は、歴史の華々しい名声を刻んだ人物とはかぎらない。無名の、したがっていかなる史料や文献にも記録が残されていない人物、しかし確かに実在した人物に関する伝記的研究というのは可能だろうか? その挑戦に果敢に挑んでみせたのが、彼の主著のひとつ『記録を残さなかった男の歴史』(1998)にほかならない。

原題をそのまま訳せば『ルイ = フランソワ・ピナゴの見出された世界――ある無名人の痕跡をめぐって、1798-1876』となるこの著作は、フランス北西部ノルマンディー地方のベレームの森近在で生まれ、長い生涯のすべてをその周辺で過ごした木靴職人をめぐる歴史である。戸籍簿の記録はあるが(したがって生没年と家族構成は判明している)、いかなる記録の対象にも

なっていないピナゴという男のまなざしをとおして、歴史家は、ノルマンディー地方の田舎に暮らした普通の庶民の生活と心性を再現しようとした。コルバンは彼の精神世界に寄り添いながら(彼はそれを感情移入と呼ぶ)、19世紀の田舎の貧困、情愛の布置、字を読み書きできない者たちの言語活動の構図、職人仕事の脆弱さ、近隣との人間関係ネットワーク、そして過去と現在をめぐるピナゴの歴史意識を感動的に描いてみせた。それはまさしく、バルザックの『人間喜劇』の一カテゴリーである「地方生活情景」のなかに収まりそうな物語である。

こうしたコルバン歴史学の文学性、あるいはそれが作家に及ぼしうるインパクトを示す例をひとつ挙げておこう。彼の代表作のひとつ『においの歴史』(1982)は、18-19世紀のパリで、人々の嗅覚の作用がどのように変貌したかをたどり、においをめぐる社会的、文化的想像力のかたちを浮き彫りにしてくれた。現代人には耐えられないような悪臭でも、18世紀のパリ人はこともなげに受容していたが、19世紀の衛生革命と都市生理学の発達によって悪臭が「創出」されていくプロセスが説得的に論じられている。当時、哲学者や医者から、視覚や聴覚に較べて下等で、動物的と卑しめられたこの嗅覚を、常人が及びもつかないほど鋭敏にそなえている人間が存在するとしたら?

そうした男を主人公にして 18 世紀パリの怪しげな界隈を舞台にした物語を創作したのが、ドイツの作家パトリック・ジュースキントで、作品の標題は『香水』(1985)である。その男グルヌイユ(フランス語で「ひき蛙」を意味する)は香水商で、かなりの距離で隔てられていてもあらゆる人間のにおいを嗅ぎつけ、とりわけある種の女の香りに抗いがたく魅了されてしまう。それでいてみずからの体からはいかなるにおいも発しない。そうした不気味な男の人生を語る小説が倒錯的な雰囲気を醸しだすのは想像に難くないが、ジュースキント自身がこの作品を構想するに際して『においの歴史』に触発されたらしいのである<sup>16</sup>。『香水』は歴史的人物を登場させないし、歴史上の

<sup>16)</sup> アラン・コルバン 『においの歴史 嗅覚と社会的想像力』山田登世子・鹿島 茂訳、新評論、1988 年、「訳者あとがき」、p. 322.

事件を描くわけでもないが、コルバンが分析した 18 世紀パリの嗅覚世界を あざやかに物語化してみせた。

#### イヴァン・ジャブロンカによる刷新

現代フランスの歴史家のなかで、コルバン以上に方法的な自覚をもって文学との対話を試み、みずからの歴史叙述において「語り手しての私」を登場させることをためらわないのがイヴァン・ジャブロンカである。

いくつもの学術賞を授けられた『私にはいなかった祖父母の歴史――ある調査』(2012) は、ジャブロンカの祖父母の生涯を可能なかぎり再現することで、20世紀ヨーロッパ史の1章を書き改めようとした。20世紀初頭のポーランドに生まれたユダヤ人が、1930年代に共産主義に共鳴して社会運動に身を投じ、それが理由で投獄される。出獄後も思想を変えず、結婚した二人はナチスの侵攻を逃れ、縁者を頼ってやっとの思いでパリにたどり着く。しかしペタン政権下での反ユダヤ人政策によって彼らは捕えられ、ドランシーを経由してアウシュヴィッツへと移送された……。

このように要約すれば、20世紀半ばの歴史の荒波に翻弄されたユダヤ系ポーランド人の、まさに絵に描いたような悲劇である。そしてそれが、ジャブロンカの父方の祖父母マテスとイデサの運命そのものだった。彼は子供の頃から自分の家系について漠然と聞かされていたが、詳細は知らなかったという。長じて歴史家となったイヴァンは2007年、自分の祖父母を研究対象にし、彼らについての歴史書を著わす決断をくだす。

『私にはいなかった祖父母の歴史――ある調査』は家族が保存してきた文書と手紙類と写真、公文書館の史料、生き残っている家族(子孫や縁者)の証言、関係者へのインタビューに依拠して書かれた。関係者たちがいつも喜んで歴史家の質問に答えてくれたわけではないが、彼は粘り強く聴き取りをした。ヴィシー政権下の国家警察の記録が、モスクワから数十年ぶりにフランスに返還されたという幸運な事情にも助けられた。そのような個人史が、この時代の諸問題を論じた確かな歴史研究によって補足され、裏づけられ、意味を肉付けされていく。その知的な往還はみごとである。

本書の特徴は、祖父母の生の記録、彼らを取り巻く歴史の流れの叙述と並行して、それを跡づける歴史家ジャブロンカの調査の旅、その困難と喜びが記されていることである。ジャブロンカは後にそれを「方法としての私<sup>17)</sup>」と命名した。具体的なことは何も知らなかった祖父母の生涯をたどるうちに、彼らの人生を彩るさまざまな出来事を記録していた文書や資料に遭遇し、感動し、ときには悲嘆に暮れる。彼の父親も同様だった。パリの南フォンテーヌブローの公文書館で、マテスの写真を見つけたイヴァンの父親は感動のあまり涙を抑えられず、こっそりその写真を持ち帰ろうとさえした。パリ市公文書館で、1939年5月マテスがサンテ刑務所に1週間収監されていたことを発見したジャブロンカは、次のように書き記す。

いつかこの発見をするために自分は歴史家になったのだと私は思う。 私たち家族のいくつもの歴史 histoires と、大仰な大文字で書かれる、 人がふつう歴史 Histoire と呼ぼうとするものの間の区別はまったく意味 がない。[……] たった一つの自由、たった一つの有限性、たった一つ の悲劇があって、それが過去を私たちの最大の富にもし、また私たちの 心が浸る毒の水盤にもするのである。歴史を研究すること、それは沈黙 のさざめきに耳を傾けることである。それは自足してしまうほどに強力 な苦悩を、人間の条件が吹き込む、悲しくそして優しい敬意によって代 置しようとする試みである <sup>18</sup>。

『私にはいなかった祖父母の歴史――ある調査』のなかで実践した方法を、

<sup>17)</sup> Ivan Jablonka, *L'Histoire est une littérature contemporaine. Manifeste pour les sciences sociales*, Seuil. « Points-Histoire », 2017, pp. 289–294. 邦訳はイヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2018 年。

<sup>18)</sup> Ivan Jablonka, *Histoire des grands-parents que je n'ai pas eus. Une enquête*, Seuil, 2012, pp. 163–164. 邦訳はイヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかった祖父母の歴史――ある調査』田所光男訳、名古屋大学出版会、2017年。引用は邦訳、p. 154 による。

歴史の認識論として発展させたのが『歴史は現代文学である』(2016)である。歴史学と文学の関係を問い直す作業がフランスで定期的になされてきたことは、すでに指摘した。本書はそのもっとも新しい成果であり、マニフェストである。

歴史学と文学が不毛な離別状態にあるのでないかという問いかけが、ジャブロンカの出発点にあった。20世紀末の「言語論的転回」は、歴史を語る言葉の文学性をあらためて強調したが、彼の立場は少し異なる。文献や史料を発掘し、調査して過去についての正確な知識を提供することが歴史家の責務だが、それを叙述するに際しては、現代文学がもつあらゆる形式と技法を活用すべきだという。歴史小説、ルポルタージュ、自伝、オートフィクションなどに向かって開かれた歴史のエクリチュールが、こうして提唱される。たとえば歴史家は、みずからの調査の過程そのものを歴史書に組みいれ、読者に提示すべきであるという。その部分は当然、物語性を強くおびる。ジャブロンカはそれを「方法としての物語 fictions de méthode<sup>19</sup>」と呼ぶ。『私にはいなかった祖父母の歴史――ある調査』のなかで、歴史家がポーランドでの実地調査について語り、遠縁の者たちとの感動的な出会いを喚起し、父親とともに公文書館で調査するさまを述べたページなどが、それに相当する。

じつはこの手法は、先に言及したローラン・ビネが『HHhH プラハ、1942年』のなかで実践したものだ。ハイドリヒ暗殺の舞台となったプラハの現地を探訪した作家は、そこで覚えた感慨を書き記し、作品を執筆する段階で遭遇した困難、迷い、逡巡などをまさに作品の一部として物語化した。そこには、歴史小説というジャンルをめぐっての問いかけを発する頁すら書きこまれている。当然、作家の「私」が物語の流れを断ち切って、ところどころに浮上することになる。歴史家ジャブロンカも小説家ビネも、歴史的な叙述のなかに、それを展開させる著者自身の知的営みを組みこんだということである。この方法は、今から1世紀以上も前にあの森鷗外が『澁江抽斎』(1916)をはじめとする「史伝」において、儒者の生涯を跡づけながら、そ

<sup>19)</sup> Ivan Jablonka, L'Histoire est une littérature contemporaine, op.cit., p. 187 sqq.

の足跡をたどるみずからの歩みを記したことを想起させる。作家としての創作は、それを支える歴史家的な問いと作業を物語の言説として取りこめるし、歴史書の叙述は歴史家の「私」、「方法としての私」、「方法としての物語」を排除しないのである。

自著の方法を解説した本である『歴史は現代文学である』は、哲学、社会学、文学批評などの近年の成果と議論を広く踏まえながら、歴史の認識論と歴史叙述の方法論を展開している。不透明になった世界を理解し、メディアの専制に立ち向かい、無関心と闘うためには歴史学をふくめた社会科学が奮闘する必要がある、と著者は力説する。市民社会のなかに流布し、市民にうったえかける言葉によって書かれた社会科学の書物が求められているのではないか。「社会科学ができるかぎり厳密かつ文学的であることが必要なのだ」。ジャブロンカの姿勢はしばしば闘争的で、挑発的だ。

19世紀には、バルザックやゾラのリアリズム小説が世界を認識し、社会を解釈した。21世紀の現在、歴史学が世界を把握し、解読しようとするならば、現代文学と社会科学のあらゆる方法と可能性を活用すべきなのである。『歴史は現代文学である』のように、ひとつの学問の過去と、現状と、将来を問うのは、そのアイデンティティが危機に瀕しているからだろう。ジャブロンカはその危機を克服するひとつの処方箋を提出した。

\*

歴史家は職業的な必然として過去や記憶にこだわるが、現代では作家や哲学者や社会学者もまた歴史と記憶を重要なテーマに据える。第二次世界大戦とナチスの暴力を描くことが現代フランス小説の大きな潮流のひとつであることを、本稿で確認できた。これら特筆すべき事件のみならず、戦後社会の政治的、経済的、文化的な変貌を個人の生涯のなかに落とし込むことで歴史を浮き彫りにするという点では、アニー・エルノーの一連の作品も文学と歴史学の遭遇を証言している。そうした文学の刷新が、歴史研究の現場にも波及していることをあらためて指摘しておこう。世紀の変り目の西暦 2000 年に、哲学者ポール・リクールが刊行した著作のタイトルは『記憶、歴史、忘

却』という<sup>20)</sup>。そのタイトルを借りるならば、現代では作家と歴史家がともに、歴史が忘却の歴史にならないようにと警鐘を鳴らし、記憶の賦活を唱えているのである。

付記:本稿の一部には、『文藝年鑑』(日本文藝家協会編、新潮社、2018年) に発表した拙稿「概観フランス文学」が部分的に取りこまれている。

<sup>20)</sup> Paul Ricœur, La Mémoire, l'histoire, l'oubli, Seuil, 2000.